

美濃市町家の修景保存計画 その1 : 岐阜県美濃市の調査概要

著者	野口 英一朗
雑誌名	生涯学習研究と実践 : 北海道浅井学園大学生涯学習研究所研究紀要
巻	5
ページ	67-80
発行年	2003-11-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00002350/

美濃市町家の修景保存計画 その1

(岐阜県美濃市の調査概要)

A Plan for the Restoration and Preservation of Old Houses in Mino City, Gifu Prefecture. Part 1

野 口 英 一 朗

NOGUCHI, Hideichiro

1. は じ め に

本稿は名城大学建築史研究室（代表川村力男助教授）が、調査と研究した岐阜県美濃市に現存している家屋群の調査概要と美濃市の歴史について述べる。次稿以降は実測調査した家屋の平面や構造の形式、町家正面の現状と復原、美濃市住民へのアンケートと町家の修景保存計画案などである。

日本での古い家屋の保存は、昭和40年代の経済の高度成長期以前まで、一部の建物を除いて手を回す余裕が無く必要なかった。高度成長期が終わりを迎えた住環境は、都市から郊外部へと社会的開発が進み大きな変化をした。生活の場である住居も家族構成や生活様式の変化と、経済的な余裕ができたなどのため改変を余儀なくされた。

本研究は名城大学建築史研究室が、家屋の破壊がなされないうちに資料を残しておくことを先決とし、美濃市内の中心部に残る18世紀中期以降¹⁾に建造されてきた貴重な町家群について実測などの調査をした結果である。調査の概略は昭和56（1981）年に外観調査を行ない、翌57（1982）年から本格的調査を開始した。本調査は同57～61（1982～1986）年にかけて単体の家屋として詳細な実測調査をした。本調査と平行して同60（1985）年と翌61（1986）年に連続した町並みとしての町家正面図の採取をして、同61年には正面の痕跡調査を実施した。6年間にも及ぶ調査で何らかの理由で失われ変化していく美濃市の歴史的な建築物を記録する作業は一応終わった。私は3年目の昭和58（1983）年から一員として本調査などに参加している。

これらの一連の調査や研究は「岐阜県美濃市の研究」の副題として、日本建築学会東海支部研究報告集²⁾並びに同学会大会梗概集³⁾に順次報告してきた。

以上のことを踏まえた上で、卯建のある町並みの“修景保存計画”を考えることが残された。主題である“美濃市町家の修景保存計画”は美濃市に現存している建物群の研究の最終段階である。修景保存計画を進めるため、美濃市住民の方に町並みについての考えや、現在の生活、将来などの意見を幅広く知るため、昭和61（1986）年に「美濃市開発と保存アンケートの調査」を試みた。今回の修景保存計画は、美濃市でできると思われる方策であり、沈滞化して

いる当地の地域活動に活性的役割の1つのきっかけを与える研究である。

2. 各地の町並み保存運動

全国各地で地元を見直そうという動向が昭和40年代に起こった。具体的な動きとして、全国に200ヶ所以上あるといわれる歴史的な町並みが関心を持たれた。日本文化のひとつの側面を知る民家研究が脚光を浴びるようになった。このような社会の流れと住民の関心の高まりを受け、昭和50（1975）年に文化財保護法の中に市町村が定める「伝統的建造物群保存地区」（以下「伝建地区」と呼ぶ）の定義が加えられた。「伝建地区」は文化庁の指導助言を受けて決定し、文部科学大臣が市町村の申し出に基づき、「伝建地区」を「重要伝統的建造物群保存地区」（以下「重伝建地区」と呼ぶ）に選定している。

平成15（2003）年7月時点で55市町村61地区が「重伝建地区」に選定されている。位置は北が北海道函館市元町末広町地区の港町から、南が島の農村集落の沖縄県竹富町竹富島地区まである。種別では宿場町・武家町・商家町・門前町・洋館群などがある。「重伝建地区」の面積は例外的な長野県南木曽町妻籠地区の1245.4haがあり、総面積の半分以上である。次が山口県萩市堀内地区の77.4haで、最小が京都市祇園新橋地区の1.4haである。20ha以下の地区が大半を占めている。選定年月日は、最初の官報告示が昭和51（1976）年9月4日に秋田県角館町地区をはじめ7地区が記載され、翌52（1977）年5月18日に岡山県成羽町吹屋地区と宮崎県日向市飫肥地区の2ヶ所が選定されている。一番新しい61番目は平成14（2002）年4月23日付で官報告示された、福岡県の八女市八女福島地区である。

美濃市美濃町地区は平成11（1999）年5月13日付けで「重伝建地区」に選定されている。選定基準は伝統的建造物群が全体として意匠的に優秀なものとされ、面積を9.3haとしている。

「重伝建地区」の中で美濃市美濃町地区と特産物があった点で似ている所は、8番目に選定された鉾山町の岡山県成羽町吹屋地区、18番目の製蠟で栄えた愛媛県内子町八日市護国地区、19番目の製塩町の広島県竹原市竹原地区、26番目の鉾山町の島根県太田市大森銀山地区、32番目の製磁町の佐賀県有田町有田内山地区などがある。また、12番目の岐阜県高山市三町は美濃市の中心部の町割りをつくった金森長近が、美濃市より以前につくった城下町の一部である。

第一章 調査概要

1. 外観調査

外観調査は美濃市の最初の調査で、昭和56（1981）年8月22日から26日の5日間をかけて、本格的な家屋実測調査の基本資料を得る目的のため実施した。家屋内の実測調査は行わずに、建物の外観形態と路上工作物や交通状況の調査をした。名城大学建築史研究室では「町並み基本調査表」を作成し現地へ赴いた。「町並み基本調査表」は家屋の建造年代・用途・階数・卯建の有無・出入口・開口部・外壁・屋根・附属物などの項目について一棟ずつチェックするものである。路上工作物は外観対象地区内の電柱・街路灯・郵便ポスト・消火栓・交通標識・

カーブミラー・案内板・広告板などについて、設置場所と個数を把握した。

外観調査対象地区は5地区に分け、A地区が旧一番町通りの泉町・本住町・加治屋町、B地区が旧二番町通りの常盤町・相生町・俵町、C地区が美濃市駅寄りの米屋町・東市場、D地区が永重町から長良川へ向かう永重町・殿町・港町、そしてE地区が飛騨金山で飛騨街道と合流する津保街道沿いの吉川町であった。調査家屋数はA地区135棟、B地区169棟、C地区139棟、D地区126棟、E地区122棟の計691棟であった。

2. 家屋の実測及び聞き取り調査

家屋の実測及び聞き取り調査の目的は、住環境が急激な経済成長で変化を余儀なくされ、歴史的な家屋が解体や大きな改変がされ、調査対象外の建物になる前にできる限り多くの町家を詳しく書き留めておくことである。家屋実測は大変重要で、本格的な調査として各建物を詳細に実測し作図するため、長い年月と人手がかかった。実測調査は昭和57（1982）年に始まり、同61（1986）年までに美濃市に現存する調査価値のある家屋は終えた。

家屋実測調査の内容は、現状の平面図・断面図・矩計図・架構造図・配置図を野帳にスケッチして採寸を記載する作業と復原平面図制作のため痕跡調査、建物の言伝えや改造の時期などを住人から尋ねて聞き取る調査やリスト表（表1～4）への記入、写真撮影である。後日疑問が生じるため補足調査を同年の10月か11月に行った。

年別の調査場所と期間は、最初の年の昭和57（1982）年が旧一番町通り沿いで7月16日～25日までの10日間調査をして、翌58（1983）年が魚屋港町筋の家屋を8月16日～25日の10日間に、3年目の同59（1984）年が旧二番町通りの町家を7月25日～8月3日にかけて10日間行なった。同60（1985）年は吉川町筋（御手洗の農家を1棟含む）の家屋調査を、7月15日～25日までの11日間に後述する正面図採取調査と平行して行ない、最終年の同61（1986）年は町並み踏査の中で、8月10日の1日だけあった。

全調査総数は75世帯120棟で、主屋76棟・附属屋44棟（うち土蔵29棟）である。年別の内訳は昭和57（1982）年が20世帯31棟調査し、主屋20棟・附属屋11棟（うち土蔵7棟）で、同58（1983）年には23世帯32棟を調査し、主屋22棟・附属屋10棟（うち土蔵9棟）であり、同59（1984）年が20世帯39棟で、主屋21棟・附属屋18棟（うち土蔵10棟）調査して、同60（1985）年では11世帯15棟、主屋12棟（御手洗の農家を1棟含む）・附属屋3棟（うち土蔵2棟）となり、同61（1986）年には主屋1棟（附属屋2棟うち土蔵1棟も含む）の調査をすることができた。

3. 正面図採取調査

実測調査は単体として家屋をみてきたが、次に連続した町並みとして考える必要があり、そのため正面の姿を採取調査をした。時期は昭和60（1985）年と翌61（1986）年に実施した。

初年の昭和60（1985）年は前項目の家屋実測調査と同期間内に交互して正面採取が行なわれた。調査面は旧一番町通り北側26棟（約250m）と南側36棟（約300m）、旧二番町通り北側31棟（約250m）と南側22棟（約200m）、魚屋港町筋東側42棟（約300m）と西側32棟（約300m）

町並み調査リスト表

所有者 家屋名	氏名	屋号	生活	江戸・明治・大正・昭和 初・中・末 年 月 日	開口部 形	窓	通常建具・格子・出格子・虫籠・無双・下地・長押(上・下)・他
所在地	字 番地				開口部 形	窓	通常建具・格子・出格子・虫籠・無双・下地・長押(上・下)・他
調査日時	昭和 年 月 日	調査員			開口部 形	窓	通常建具・格子・出格子・虫籠・無双・下地・長押(上・下)・他
解答者	氏名	年齢	歳	続柄	開口部 形	窓	通常建具・格子・出格子・虫籠・無双・下地・長押(上・下)・他
世帯主の職業	団員役員・専門的職業・公務員・車務員・職人・農漁・商業・自営業・会社員・他				開口部 形	窓	通常建具・格子・出格子・虫籠・無双・下地・長押(上・下)・他
階数	平家・中二階・二階・他				開口部 形	窓	通常建具・格子・出格子・虫籠・無双・下地・長押(上・下)・他
築年	木・RC・SC・他				開口部 形	窓	通常建具・格子・出格子・虫籠・無双・下地・長押(上・下)・他
形式	種別	用途	所有		開口部 形	窓	通常建具・格子・出格子・虫籠・無双・下地・長押(上・下)・他
独立家屋	住宅・旅館・医院・間屋	専用地	持地・持家		開口部 形	窓	通常建具・格子・出格子・虫籠・無双・下地・長押(上・下)・他
二戸建家屋	工場・小売店・事務所	併用地・持家	借地・持家		開口部 形	窓	通常建具・格子・出格子・虫籠・無双・下地・長押(上・下)・他
連軒家屋(長屋)	倉庫・他(具体的に)	併用地・持家	借地・持家		開口部 形	窓	通常建具・格子・出格子・虫籠・無双・下地・長押(上・下)・他
共同家屋(重畳)		併用地・持家	借地・持家		開口部 形	窓	通常建具・格子・出格子・虫籠・無双・下地・長押(上・下)・他
他		併用地・持家	借地・持家		開口部 形	窓	通常建具・格子・出格子・虫籠・無双・下地・長押(上・下)・他
外	別	木造・石造・生垣・築地・土・ブロック造・コンクリート造・レンガ造・トタン・フェンス・他	(1M以上)		開口部 形	窓	通常建具・格子・出格子・虫籠・無双・下地・長押(上・下)・他
(無・有)	構	木造・石造・生垣・築地・土・ブロック造・コンクリート造・レンガ造・トタン・フェンス・他	(1M以下)		開口部 形	窓	通常建具・格子・出格子・虫籠・無双・下地・長押(上・下)・他
門	棟・梁・柱・冠木・長屋・腕木・ブロック・コンクリート・他				開口部 形	窓	通常建具・格子・出格子・虫籠・無双・下地・長押(上・下)・他
(無・有)	扉(無・有)	門登(無・有)			開口部 形	窓	通常建具・格子・出格子・虫籠・無双・下地・長押(上・下)・他
庭(無・有)	前・後・横	脇木(無・有)・石(無・有)・池(無・有)			開口部 形	窓	通常建具・格子・出格子・虫籠・無双・下地・長押(上・下)・他
土台	間土台・入口土台・付土台・礎石・他	間口	間尺	M	開口部 形	窓	通常建具・格子・出格子・虫籠・無双・下地・長押(上・下)・他
出入口	間尺 M	大戸(吊・開・引込・潜戸付)・シャッター(色)			開口部 形	窓	通常建具・格子・出格子・虫籠・無双・下地・長押(上・下)・他
(平入・裏入)	引戸(木・サッシュ・色)	・開戸(木・サッシュ・色)			開口部 形	窓	通常建具・格子・出格子・虫籠・無双・下地・長押(上・下)・他
左・左1・中	引違戸(木・サッシュ・色)	・格子戸・ガラス戸・板戸			開口部 形	窓	通常建具・格子・出格子・虫籠・無双・下地・長押(上・下)・他
右1・右・金	欄干・鴨居・入口扉・他	勝手口(色)			開口部 形	窓	通常建具・格子・出格子・虫籠・無双・下地・長押(上・下)・他
正壁	土(真・大)・板(縦・横)・筋箱(色)・漆喰(色)・ペイント(色)・タイル(色)・コンクリート打放(色)・モルタル				開口部 形	窓	通常建具・格子・出格子・虫籠・無双・下地・長押(上・下)・他
面	彩色セメント(色)・レンガ(色)・かきおとし(色)・なまこ・カラー鉄板(色)・よいい・リシン・他				開口部 形	窓	通常建具・格子・出格子・虫籠・無双・下地・長押(上・下)・他
内法材	鴨居・敷居・長押・他	構造材	根敷居・指鴨居・耐震・他		開口部 形	窓	通常建具・格子・出格子・虫籠・無双・下地・長押(上・下)・他

表1 調査リスト (1)

町並み調査リスト表

形 状		切・入・寄・宝・陸・他		卵 建		無・有 (捨・卵建)		江 戸 (中・末) ・明治 (初・中・末) ・大正 (初・末) 昭和 (戦前・戦後)		年 月 日		年 前	
屋 材	葺 材	棧瓦 (一・唐・丸・他) ・本瓦・鬼瓦・降り丸瓦 (1本・2本) 降縁・権児縁・文縁 (家紋 無) ・鉄・銅・スレート・セメント瓦 アスベスト・草 () ・皮・板・洋瓦・他 ()						建築年代					
	軒 樋	丸・角＝鉄・銅・塩ビ・他						施 工 名	よりがな				
根 付 加 物	軒 廻	船押・壁梁・鼻桁・腕木 (肘木) ・出梁・他 けりば・左 (無・上・下・出) () ・右 (無・上・下・出) ()						施 工 名	よりがな				
	付 加 物	屋上 (平・滴・塔屋) ・アンテナ・温水器・物干し クロー・他 パラペット 無・有 (木にトタン・金属板・ビニール・RC・他) () 位置 (1階庇・1階屋根・2階屋根・他) ()						根 拠	町松岡・屋敷岡・間取岡・家相岡・墨書・普請板・見舞板・差出性・ 証文・図札・他 言い伝え (だれから) ()				
隣 地 角 地	路 地	無・有 (左・右) 幅 () 間 尺 () M ()						代 文 書	無・有 () ()				
	地 角 地	無・有 (左・右)						古 図	無・有 () ()				
改 築 材 (本 数)	規 模	1/8・1/2・2/8 増設 () ()						有	看 板 () 枚 広 告 () 枚				
	構造材 (本数)	柱 () ・指物 () ・銅産 () ・長押 () 備考 (位置) 小屋組 () ・梁 () ・束 () ・鴨居 () 指鴨居 () ・枳 () ・船 () ・方立 () 床 () ・他						位 置	1階部 () 枚・庇 () 枚 1階部 () 枚・庇 () 枚 2階部 () 枚・庇 () 枚 2階部 () 枚・庇 () 枚 屋根 () 枚・パラペット () 枚 屋根 () 枚・パラペット () 枚 塔状タワー () 枚・昇 () 枚 塔状タワー () 枚・昇 () 枚				
外 壁 開口部 仕切	開口部 仕切	大戸・蔀・揚戸・無窓窓・虫籠窓・明障子・金属格子 格子・指鴨居・鴨居・雨戸・戸袋・ガ戸・ガ隠子・横 板戸・舞良戸・中透戸・サッシュ・ジャッター・他						板 様 式	平面型・柱型・球型・杉玉・提灯 ネオンサイン・パラペット状看板・のれん 模型・サインポール・ペイント・他				
	外 壁 開口部 仕切	土壁・漆喰・なまこ・下見板・よろい・トタン・カラー鉄板 モルタル・レンガ・小壁・仕切壁・他						形 状	平面型・柱型・球型・提灯・のれん ネオンサイン・パラペット状看板・模型 看板に広告を含んだもの・他				
壁 根 庇	壁 根	棧瓦・本瓦・鉄板・銅板・板・皮・草・ベスト・他						色	生地色 (自然色) 色 生地色 (自然色)				
	庇	棧瓦・本瓦・鉄板・銅板・板・皮・草・ベスト・他						影 影 色	色 生地色 (自然色) 色 生地色 (自然色) 色 布色 () 色 カラー 色 布色 () 色 カラー				
修 理 材 (本 数)	規 模	1/8・1/2・2/8 増設 () ()						材 質	木・竹・石・布・紙・石付・漆喰 テラコッタ・陶磁器・ガラス・合成樹脂 アルミ・鉄板・銅板・金網・杉玉・他				
	構造材 (本数)	柱 () ・指物 () ・銅産 () ・長押 () 備考 (位置) 小屋組 () ・梁 () ・束 () ・鴨居 () 指鴨居 () ・枳 () ・船 () ・方立 () 床 () ・他						告 白	木・竹・石・布・紙・石付・漆喰 テラコッタ・陶磁器・ガラス・合成樹脂 アルミ・鉄板・銅板・金網・杉玉・他				
外 壁 開口部 仕切	開口部 仕切	大戸・蔀・揚戸・無窓窓・虫籠窓・明障子・金属格子 格子・指鴨居・鴨居・雨戸・戸袋・ガ戸・ガ隠子・横 板戸・舞良戸・中透戸・サッシュ・ジャッター・他						備考					
	外 壁 開口部 仕切	土壁・漆喰・なまこ・下見板・よろい・トタン・カラー鉄板 モルタル・レンガ・小壁・仕切壁・他											
壁 根 庇	壁 根	棧瓦・本瓦・鉄板・銅板・板・皮・草・ベスト・他											
	庇	棧瓦・本瓦・鉄板・銅板・板・皮・草・ベスト・他											

表2 調査リスト(2)

民家調査リスト表										名城大学建築史研究室 16	
ふりがな 民家氏名	氏宅			家 の 残 存 状 況	大 小 所見 1 1 1 2 8 4	文化財指定	重文・県指・市指・町指・村指・他				
所 在 地	番地				大 小 所見 1 1 1 2 8 4		屋 根 小 屋 棟 束 外 内 壁 土 台 風 呂	現 状	復 原 (旧状)		
調査期日	昭和 年 月 日 ~ 月 日				大 小 所見 1 1 1 2 8 4			形式	切妻・入母屋・寄棟・宝形・切・寄・入・宝・不明		
家の種類	社寺 庫裏 武農 漁町 宿他 院 裡 院 家 家 家 家				大 小 所見 1 1 1 2 8 4			葺材	茅・藁・瓦・板・皮・他 茅・藁・瓦・板・皮・不明		
家の使用目的	主 釜 煮 離 茶 納 土 土 板 門 長 他 屋 屋 院 れ 室 屋 倉 蔵 倉 屋 屋 門				大 小 所見 1 1 1 2 8 4			外 内 壁	又石・垂木・瓦葺・和小屋・又石・垂木・瓦葺・和小屋・不明		
家の使用目的	家の古い伝え 資料 調査所見			大 小 所見 1 1 1 2 8 4	棟 束	有・桧・無 有・桧・無					
用 途	家のおい伝え 資料 調査所見			大 小 所見 1 1 1 2 8 4	外 内 壁	大壁・真壁・土壁・板壁・草壁 大・真・土・板・壁・不明					
役 職	家のおい伝え 資料 調査所見			大 小 所見 1 1 1 2 8 4	土 台	玉石・生垣のみ・御のみ・無 玉石・入口のみ・御のみ・無					
家 納	家のおい伝え 資料 調査所見			大 小 所見 1 1 1 2 8 4	風 呂	入口部・土間部・廊下式・他 土間部・入口部・不明・他					
山 積 等	家のおい伝え 資料 調査所見			大 小 所見 1 1 1 2 8 4	土 台	玉石・生垣のみ・御のみ・無 玉石・入口のみ・御のみ・無					
建築年代	家のおい伝え 資料 調査所見			大 小 所見 1 1 1 2 8 4	風 呂	入口部・土間部・廊下式・他 土間部・入口部・不明・他					
と その	家のおい伝え 資料 調査所見			大 小 所見 1 1 1 2 8 4	土 台	玉石・生垣のみ・御のみ・無 玉石・入口のみ・御のみ・無					
根 拠	家のおい伝え 資料 調査所見			大 小 所見 1 1 1 2 8 4	風 呂	入口部・土間部・廊下式・他 土間部・入口部・不明・他					
建築時	家のおい伝え 資料 調査所見			大 小 所見 1 1 1 2 8 4	土 台	玉石・生垣のみ・御のみ・無 玉石・入口のみ・御のみ・無					
移築時	家のおい伝え 資料 調査所見			大 小 所見 1 1 1 2 8 4	風 呂	入口部・土間部・廊下式・他 土間部・入口部・不明・他					
将来の	家のおい伝え 資料 調査所見			大 小 所見 1 1 1 2 8 4	土 台	玉石・生垣のみ・御のみ・無 玉石・入口のみ・御のみ・無					
改造計画	家のおい伝え 資料 調査所見			大 小 所見 1 1 1 2 8 4	風 呂	入口部・土間部・廊下式・他 土間部・入口部・不明・他					
記録者	写真撮影 筆記者			大 小 所見 1 1 1 2 8 4	土 台	玉石・生垣のみ・御のみ・無 玉石・入口のみ・御のみ・無					
調査員氏名	家のおい伝え 資料 調査所見			大 小 所見 1 1 1 2 8 4	風 呂	入口部・土間部・廊下式・他 土間部・入口部・不明・他					

表3 調査リスト(3)

町並調査リスト表										版	
家屋名		氏宅			屋号		年		江戸・明治・大正・昭和		
所在地		字								番地	
調査期日		昭和 年 月 日			調査員						
解答者		氏名			年齢		職 柄				
世帯主の職		団休役員・専門的職業・公務員・事務職・職人・農業・商業 自営主・金持ち・他									
階		1階・中2階・2階・他									
間口・奥行		間		尺×		幅		尺(M× M	
路		地		無・有(右・左)		軸(間		尺 M	
角		地		無・有(右・左)							
瓦		無・有(種類)									
のし段数		本		棟		段		卯建棟		段	
卯位		昭		右・左				起り・反り・平担・先反り		枚	
形		漆喰塗籠(ばちまき) (色) 土壁塗籠 腕木+桁 他		卯 建 瓦 の 意 匠		冠		袖			
建						鬼		軒			
袖		形		漆喰・真壁・板・ヨロイ 他		材		質		漆喰・土壁・板・他 (色)	
壁		位		階		1階(右・左)・2階(右・左)					
備考											

名城大学建築史研究室

表 4 調査リスト (4)

の正面の実測をした。棟数は189棟にもものぼる調査であった。

次年は8月5日から12日（途中1日は郡上郡八幡町見学で休み）までの6日間実施した。旧二番町通りは残りの北側14棟（約150m）と南側15棟（約200m）、魚屋港町筋は続きの東側13棟（約150m）と西側19棟（約150m）であった。新たに旧下横町の加治屋町と俵町を算用数字の7の字型に27棟（約250m）を調査した。2年間で7面にわたる277棟の調査ができた。これで主要な地区の正面採取は一通り済んだ。

4. 正面痕跡調査

次に建物が建てられた時期に正面がどのような外観になるかを確かめるため、正面の痕跡調査を行った。痕跡を記録するため通りに面する土台・柱・框敷居・指物などの部材を、家屋ごとに図面化した調査用紙をつくり現地に臨んだ。調査結果を研究室に持帰り、復原正面図を書いた。図面化した調査用紙を事前に作成して現地調査を行なったため、対象家屋は昭和60（1985）年に正面採取をした189棟に限られた。

調査用紙を作る段階で前面部分を新建材などで覆っている建物や鉄筋コンクリートなどの構造の建物は、調査不用として71棟除外した。実際に痕跡調査を行った家屋は118棟であった。痕跡調査を試みたが十分な結果が得られず、復原できなかった40棟を復原不能家屋とした。新築など建てて日が浅く、改造の形跡がない無改造家屋は12棟あった。正面復原図は66棟のみの完成となった。正面の痕跡調査は昭和61（1986）年8月3日・4日・5日の3日間で完了した。

5. アンケート調査

アンケート調査は、岐阜県美濃市の中心部に残る町並みの修景保存計画を行なうため、当市住民に対し将来計画・住まいや近隣の環境・古い町並みやその保存等について、どのように考えているかを、アンケート形式によって調査したものである。

アンケート調査は「美濃市開発と保存のアンケート調査」（表5～10）と題して行った。内容はA：回答者の年齢・性別など、B：現在住んでいる建物について、C：現在の住まい周りについて、D：美濃市について、E：町並みについて、F：町並みの保存について、G：美濃市の将来についての7項目に分け回答していただいた。設問は97題あり、10題を文章で回答してもらい、他は2個から37個までの回答予想例から選んでいただいた。

アンケート用紙は、昭和61（1986）年8月2日に各家屋に配布し、同月12日と13日の両日に回収した。配布対象地域は美濃市全域で、予め古い町並みが残っている中心部・その周辺部・郊外部の3地区に分けた。配布部数は3地区それぞれ100部を基準に300部を予定した。実際の配布部数は中心部69部・周辺部106部・郊外部102部の計277部であった。回収部数と回収率は中心部66部（回収率96%）・周辺部99部（同93%）・郊外部91部（同89%）の計256部が回収でき、回収率は全体で92%の高率であった。

ある。と答えた人は、どのような構造の建物に住んでいますか。

理想として、どのような家に住みたいですか。

得造は、

これから成住所で生活しますか。

次の住居のことで満足していますか。

2.現在の住まいの周りはどんな所ですか

《交通》

歩行者は安全に歩けますか。

自動車は通行しやすいですか。

交通の便は良いですか。

特に何が便利ですか。

道路の広さや舗装状態はいかがですか。

《災害》

火災についての対策は、

水害・地震などの避難場所は、

《衛生》

し尿処理方法は、

ゴミの処理方法は、

《医療》

医療機関はありますか。

かかりつけの医師はいますか。

《生活》

買い物の便はどうですか。

近所付き合いは、

どのようなところで世間話などをしますか。

町内会の行事などに積極的に参加しますか。

どのような店・施設をよく利用していますか。

□雑居造 □コンクリートブロック造 □プレハブ造 □木造
□築瓦造 □鉄骨鉄筋コンクリート造 □鉄筋コンクリート造
□その他 ()

□一戸建て □アパート □マンション □共同住宅
□その他 ()

□コンクリートブロック造 □プレハブ造 □木造
□築瓦造 □鉄骨鉄筋コンクリート造 □鉄筋コンクリート造
□その他 ()

□はい □いい □わからない

□甚さ □明るさ □風通し □夏冬の涼しさ
□広さ □静かさ □日当たり □冬の暖かさ
□家事のしやすさ □炊事場・風呂・便所などの排水処理
□ない □その他 ()

□よい □ふつう □わるい □よい □ふつう □わるい
□よい □ふつう □わるい □よい □ふつう □わるい

□防火壁がある □消火栓が近くにある □火災報知機がある
□防火溝がある □消火器を持っている
□その他 ()

□ある □ない □近い □近い □遠い □近い □遠い
□隣接者と話し合いをしている □知らない

□水洗 □くみ取り
□個人処理 □公共処理

□近くにある □遠くにある □全くない □知らない
□いる □いない

□よい □ふつう □わるい □よい □ふつう □わるい
□よい □ふつう □わるい □よい □ふつう □わるい

□文化施設 □医療・体育施設 □飲食店 □デパート
□教育施設 □医療施設 □娯楽施設 □喫茶店 □居酒屋
□スーパーマーケット □その他 ()

表6 アンケート (2)

美濃市開発と保存のアンケート調査

町名及び大文字。

年齢 満 才 性別 男・女

職業

家族数は何人ですか。

出身地はどこですか。

以前住んでいた所はどこですか。

当地にいつごろから住んでいますか。

勤務先は、

敷地の所有は、

建物の所有は、

自動車は持っていますか。

1.住宅 (建築物) について

通りに面している建物の用途は、

今までに家を改造や修理したことが、

ある。と答えた人は、どこを改修したことがありますか。

通りに面している建物を建て替え (新築) の意図はありますか。

□本住町 本住町 本住町
□米野町 米野町 米野町
□上河和 上河和 上河和
□下河和 下河和 下河和
□常盤町 常盤町 常盤町
□吉川町 吉川町 吉川町
□梅山町 梅山町 梅山町
□亀野町 亀野町 亀野町
□上河和 上河和 上河和
□下河和 下河和 下河和
□常盤寺 常盤寺 常盤寺
□御手洗 御手洗 御手洗
□相生町 相生町 相生町
□永重町 永重町 永重町
□小倉町 小倉町 小倉町
□富野町 富野町 富野町
□保木町 保木町 保木町
□東市場町 東市場町 東市場町

□建築業 □卸売業 □建設業 □卸売業 □小売業 □サービス業
□運輸・通信業 □金融・保険業 □電気・ガス・水道業 □公務員 □無職
□製造業 (□食品品 □繊維・衣料 □木材・家具 □出版 □ゴム □窯業)
□その他 ()

□経営者 役員 自主主
□労働者 会社員 使用人

..... 人

..... 県 市 町

..... 県 市 町

..... 年頃 代前 年前

..... □市内 □市外 □県外

..... □持地 □借地

..... □持家 □借家 □アパート等 □その他 ()

..... □乗用車 台 → (乗用車 台、トラック 台)
..... □持っている □借りている □ない
..... □乗車台は旧1.2番町通りや城屋町筋に □面している □面していない
..... □持っていない

.....現在
..... □工務所 □事務所 □作業場
..... □倉庫 □車庫 □店 □事務所 □作業場
..... □旅館 □空家 □その他 ()
..... □住居 □工場 □倉庫 □空家 □その他 ()
..... □旅館 □空家 □その他 ()

..... □ない

..... □外壁 □出入口 □窓 □台所 □風呂 □便所
..... □居室 □居間 □子供室 □にわ □別棟
..... □その他 ()

..... □ある □ない □わからない

..... □ある □ない □わからない
..... □ある □ない □わからない

表5 アンケート (1)

表7 アンケート (3)

お住まいの地区であつたらしい と思う店・施設はありますか。	……	□文化施設 □医療・体育施設 □飲食店 □デパート □教育施設 □娯楽施設 □喫茶店 □居酒屋 □深夜まで営業している小型スーパー □その他（
お住まいの地区で不足している と思う店・施設はありますか。	……	□文化施設 □医療・体育施設 □飲食店 □デパート □教育施設 □娯楽施設 □喫茶店 □居酒屋 □深夜まで営業している小型スーパー □その他（
公園・遊び場はありますか。	……	□近くにある □遠くにある □ない
騒音・悪臭などで困ることがあ りますか。	……	□ある □ない □わからない
【附設】 防犯対策をしていますか。	……	□はい □いいえ
3.美濃市についての住民意識		
美濃市は住み心地がよいと思いますか。	その理由（	□よい □ふつう □わるい
美濃市の好きな点は。	（	
美濃市の嫌いな点は。	（	
例 住みやすい 人づかい 静かである 田舎だから 先祖代々の生活がある 人の移動がある 自然がある など		
美濃市の中で、あなたが親しみ、愛着のある所や行事は。	（	□いくつでも）
美濃市で不足していると思う店・施設はありますか。	……	□文化施設 □保健・体育施設 □飲食店 □デパート □教育施設 □娯楽施設 □喫茶店 □居酒屋 □深夜まで営業している小型スーパー □大型スーパー □ない □その他（
「美濃市」と言っていると何を思い浮かべま すか。（いくつでも）	……	□吊り橋 □和紙 □神社 □灯台 □美濃町駅 □月形 □山崎 □松茸 □城山 □片岡隆谷 □越美濃線 □金澤 □自來 □田圃 □山河 □大矢田もみじ会 □野口五郎 □国道 156号線 □吉川町並み □村瀬氏 □洲原祭り □博越のまい祭り □水琴窟 □屋敷寺の花ざ祭り □大矢田祭り □ここ祭り □生徳の芋ふた祭り □山車 □青柳神社「おとこの旗」 □美濃祭り □民間行事（正月・節分・お月見 など） □ない □その他（
4.町並みに対しての住民意識		
あなたは町並みなどの現代的な建築 に感じ、また考えていますか。	……	□良いものと思う □関心がある □何も感じない □良くない □その他（
あなたは「町並み」と言っていると何を思 い浮かべますか。	……	□山井病院・大畑式立廻行・十六廻行などの現代的な建築 □五井和紙 □町街 □看板 □電柱 □御膳 □伊達・瓦 □空 □灯台 □釜山 □土蔵 □櫓水 □電線 □伊達 □美濃町駅 □長良川・泉蔵所 □格子の家 □ボスター □城東南線 □国道 156号線 □舗装道路 □駐車庫 □ない □その他（

表8 アンケート(4)

[illegible]

第2章 美濃市の歴史と現在

1. 美濃市の位置と地勢

美濃市は岐阜県にあり中濃地方のほぼ中央に位置している。南は関市に、東が武儀郡武儀町に、北が郡上郡美並村に、西が武儀郡武芸川町及び同郡洞戸村に接している。市役所は市域の南部にあり、東経136°54'40"、北緯35°32'40"にある(図1)。

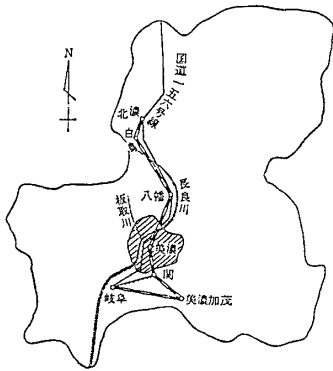


図1 美濃市の位置

美濃市の総面積は116.91km²で、南北15.8km、東西12.7kmある。当市の市域は南部にわずかな平地が開け、北に行くと山地の中に入る。当市の最高地点は北境の瓢ヶ岳(ふくべがだけ)の海拔1161mで、最低地是最南部の志摩地区である。土地状況は8割が山林で覆われ、1割が田畑として耕かされ、残りは宅地などになっている。長良川は市内で2度大きく湾曲しながら北から南に流れ、西から流れて来る板取川と市の中央部で合流している。

本研究対象の町家群は、南部の平坦地に残されている。

2. 近世以前の美濃市

美濃市での人の生活は大矢田にある丸山古窯跡の発掘により、先土器時代まで遡ることができる。縄文時代の営みは市内4ヶ所の遺跡から土器や石器が出土し確認され、次の弥生時代には市内数ヶ所で弥生式土器の使用が認められている。古墳は小規模な円墳のみが前野地区以南で22ヶ所発見されている。

美濃国に全国的支配が始まるのは、大和朝廷の勢力が4世紀中頃に西濃地方から入り、中濃地方にも4世紀後半に影響が出はじめた。美濃国は5つの国造が仕え、現美濃市は牟婁都国造の中に入った。この国造は朝廷に対し忠実であった様子で、県主として美濃県主と加茂県主が定められた。

大化の改新(645年)によって律令制になり、今の美濃市は武芸郡(武儀郡)に入ったと思われる。改新後も牟婁都国造の統率者が引き続き武芸郡を治めた。壬申の乱(671年)後は新たな律令体制がとられ、855年に武芸郡の北部が郡上郡として分離した。以後武芸郡は武芸九郷をもつ中規模の郡になり、武芸九郷の有知郷・生櫛郷・御手洗郷の三郷が現在の美濃市の中に位置した。

平安時代中期以降の中濃地方は荘園が多く、絹を貢進して貴族たちの経済を支える重要な所であった。荘園が広がるにしたがい、領主が新しい荘名を付け従来の郡・郷の名称が改廃された。土地も国衛領・本所領・寺社領・武家領など複雑な形態になった。今の美濃市には上有知(上有智)荘・武義荘などがあった。

中世になると、美濃国の守護職は美濃源氏の土岐氏が任じられた。上有知荘も美濃源氏の一族が荘官となり治め、上有知氏を称した。土岐氏の支流である浅野氏は14世紀前半から上有知

莊の地頭職代官として支配した。藍見や大矢田地区から武芸谷にかけての山口郷は美濃佐竹氏が地頭職であった。浅野氏と美濃佐竹氏が支配した後は戦国時代になり、誰がこの地方を治めていたか定かではない。

中世の美濃地方には重要な出来事があり、奈良時代まで遡るとみられる和紙を作る製造法の発達があった。

3. 近世の美濃市

a. 支配者の系統

戦国時代の下克上の世の中から徐々に傑物が現われ始め、上有知（こうずち）⁴⁾でも初代佐藤氏が天文年間（1532～1554）に上有知の北方鉾尾山に、上有知城とも呼ばれた城砦を築いたようであった。二代目の秀方は織田信長や豊臣秀吉の幕下の武将で武儀郡の大半を領有した。三代目方政は豊臣秀吉の死後に起こった関ヶ原の合戦で、西方の石田三成側につき敗走した。佐藤氏は三代で滅亡した。

次に今の美濃市を語る上で最も重要な人物の金森長近（かなもり・ながちか）が、佐藤氏の領地であった上有知を戦功により加封され治めた。長近はこれで、飛騨国一国と武儀郡を領する大名となった。金森氏は慶長16（1611）年に二代目の可重で断絶した。領地は幕府領になり上有知に代官所が置かれるようになった。元和元（1615）年と同5（1619）年の二度にわたり、尾張藩の藩領に殆どの武儀郡が編入され、明治4（1871）年の廃藩置県になるまで尾張藩領であった。

b. 町の移転と交通

上有知の軍事・経済・交通は、金森長近にとってみれば本領の飛騨国を守る上で欠くことのできない所であった。長近は幼少であった次子の長光を連れて前領主の居城であった鉾尾山を捨て、丸尾山を小倉山と改名し、慶長10（1605）年に小倉山城を築いた。築城と共に翌11（1606）年にしばしば洪水の被害を受けていた、長良川沿いの低地の古町を現在の高い位置に移した。移転先は古い町並みが残る場所で、町割りも今とほとんど変わっていない。長近は以前にも越前大野と飛騨高山の城下町を造っていた。

上有知の町割りは漢字の「目」字の形をし、小倉山城より南に2本の道幅4間（7.2m）、長さ250間（454m）の東西に走る大路を造り、それが旧一番町通り（泉町・本住町・加治屋町）と旧二番町通り（常盤町・相生町・俵町）である。2本の大路を繋ぐため上横町・七軒町・魚屋町・下横町の4筋の幅2間半（4.2m）、長さ70間（127m）の小路を配している。小倉山城と長良川へは魚屋町の小路が北に伸びている。計画的して出来た上有知の城下町には、岐阜街道・関街道・津保街道・郡上街道・牧谷街道・武芸街道の6本の街道が集まり、それぞれ重要な役割をもっていた。長近は城下町の軍事機能を重視せずに通りの幅を広くして枡形を造らず、商業の町を主眼として計画した様子が窺われ、先見性を高く評価してもよい。

人の交通と物の流通の手段は陸路よりも、長良川を利用した舟運が大きな役割を果たしていた。上有知の船による運搬は上流が郡上や板取方面、下流が岐阜や桑名方面であった。上有知

地方の人と物の拠点として、県史跡に指定されている上有知湊跡の灯台や石段が往時の面影を残している。

c. 産業

上有知は代官所が置かれていたため、行政や経済の中心地として栄えた。特産物の美濃紙が有名であるが、主たる産業は米の生産であり、幕末の美濃国の総石高は65万石であった。また、金森長近は隣の関にいた鍛冶の一派を移し、上有知の繁栄の一策とした。

金森長近は三と八の日に六斉市を定期に開くことで、上有知を物資の集散地にした。六斉市で取り扱われた品は和紙をはじめ穀物・糸・綿・楮などであった。長近は上有知の経済の繁栄や産業の発展に果たした功績は計り知れない。

d. 災害

上有知の近世中期までの一般家屋の屋根は、殆ど板葺きや茅葺きなどの植物性であったと思われるため、しばしば大火災に襲われた。大火以後に瓦が葺かれたり、卯建が構えられたりした。江戸時代の上有知では4回の大火災があった記録が残されている。

享保の大火は享保8（1723）年にあり、町の4分の3を焼く大火であった。現在の美濃市の家屋はこの火災以後のものと考えている。延享元（1744）年の延享の大火は二の中町（現：相生町）辺りが焼失した。文政4（1821）年に起こった文政の大火では今町（現：吉川町）の50軒を焼いた。慶応3（1867）年にあった慶応の大火は、今町（現：吉川町）から二の町（現：常盤町）南側にかけて推定焼失家屋が60戸であった。

洪水は長良川をはじめ、支流の板取川などの氾濫により起こった。江戸時代の260年間に長良川は、40回も洪水を起こした記録が残っている。洪水の都度、川沿いの住民は堤防の決壊、家屋の流失、死傷者など甚大な被害を受けていた。洪水と川普請はたちごっこであった。

江戸時代に全国的に発生した凶作は、例外なく上有知まで及んでいた。享保の飢饉や天明2～8（1782～1788）年の天明の飢饉では、低温・降雨・洪水・長雨による連続凶作であった。天保の飢饉は低温と長雨による大凶作で、天保7（1836）年が最も被害が多かった。

4. 近世以降の美濃市

a. 行政

美濃国は明治4（1871）年の廃藩置県で美濃県になった。同6（1873）年には上有知が大小区制の第八大区九、十、十一、十四、小区に入り、上有知に戸長役場を置いた。美濃県と飛騨の高山県で岐阜県が同9（1876）年にできた。同12（1879）年には上有知に郡役所が置かれ、上有知、安毛（あたげ）、曾代、前野の4カ村総合戸長役場が上有知に同17（1884）年に設置された。同22（1889）年の市長村制施行で上有知町となった。郡役所を同28（1895）年に小倉山山麓に新築移転した。同44（1911）年には上有知町から美濃町に町名が変わり、大正12（1923）年に郡制度が廃止された。安曾野村の安毛、曾代、前野の3地区を同14（1925）年に合併した。昭和29（1954）年は美濃町と洲原村、下牧村、上牧村、藍見村、中有知の一部の合併で美濃市が誕生した。

b. 交通

明治に入ってもまだ、陸上運輸は未発達であったため、舟運が物資運送の主流であった。明治時代初めの上有知の川湊は岐阜・大垣・笠松と共に県下の4大川湊であった。明治初期の道路網は、主要道に大きな変化は見られないが、明治20年代に物資輸送の荷馬車の通行が多くなった。上有知川湊の上有知の表玄関としての使命は、陸上交通がしだいに発達し、鉄道の開通に伴い終わりを告げた。鉄道は明治44（1911）年に美濃町線（岐阜市神田町から上有知町間24.9km）が、大正12（1923）年には越美南線が美濃太田と美濃町間（17.7km）に開業した。越美南線は昭和9（1934）年には白鳥町の北濃まで延長されたが、同61（1986）年12月に長良川鉄道として第三セクターによる経営体制に移行した。美濃町線は美濃町と新関の間が平成11（1999）年3月に廃線になった。

大正時代に入ると乗合自動車やトラックが使用されだした。大正4（1915）年に吊り橋の美濃橋（重要文化財）が架けられ、同12（1923）年には港町にトンネルが開通し、昭和2（1927）年には常盤町から広岡町にバイパスが建設された。戦中の道路拡充整備は頭打ちとなったが、戦後は再開された。国道156号線が同40（1965）年に長の瀬川を埋立て、歴史的な町並みが残る美濃市中心部を迂回する形で通った。

c. 産業

産業は江戸時代から住民生活の基盤をなす稲作主体の農業であった。地場産業として特徴付けたものが製紙業と製糸業や養蚕であった。

製紙は文明開化により紙需要が増大し、紙漉き業者や紙商人は激増した。明治19（1886）年の商業戸数割表からも穀物商に続き紙商人が2番目に位置していた。和紙原料の楮・三桠・雁皮の生産は全国的に機械工業による洋紙生産の発達と、大正時代に入ってからマニラ麻の輸入で圧迫されたため衰えていった。昭和20（1945）年以降一時的に手漉き製紙業は活発になったが、手工業であるため経済の高度成長の波に乗れなかった。手漉きは機械製紙に変わらざるをなかったため、衰退の一途をたどる事になった。

養蚕や製糸は岐阜県内の主要な土地で、明治10年代から製糸工場があった。国の輸出振興から、製糸は明治20（1886）年頃から機械製糸の技術改良により、製糸工業として定着し飛躍的に発達して増大した。工場の動力は蒸気で、従業員は50人前後であった。養蚕は昭和4（1929）年の世界大恐慌で繭価が大暴落し、次第に減少していった。

明治末にいたって電気事業が開始され、明治43（1910）年に長良川発電所が名古屋電燈株式会社によって立花に建設された。安毛にも本邦初の岩窟舎屋をもつ板取川発電所が大正3（1914）年に竣工した。

d. 災害

明治24（1891）年の濃尾地震は岐阜県本巣郡根尾村で発生し、地震の規模はマグニチュード8.4と非常に大きく、県下に多大な被害をもたらした。美濃市は震源から30kmしか離れていなかったにもかかわらず、割合少ない被害であった。

明治29（1896）年は記録的な大雨が降った年で、7月に豪雨で河川が氾濫し、8月に台風によって被害をもたらし、9月に入ると1週間に630.6mmの降雨量があった。毎年幾多の台風が来襲するが、明治以降に被害が大きかったのは、明治35（1902）年、同40（1907）年、大正元（1912）年、昭和34（1959）年の伊勢湾台風である。例えば、大正元年の台風の被害は、県下で死者128人、全壊家屋1万2千戸で最大であった。

- 1) 美濃市、『美濃市史 通史編 上巻』、昭和54年2月20日。p558. 享保8（1723）年と延享元（1744）年の2度の大火により。
- 2) 川村力男・水野信太郎、「旧美濃町の街区割について（岐阜県美濃市の研究1）」、『日本建築学会東海支部研究報告集』、第20号、昭和58年2月。水野・川村、「旧美濃町街路の家屋形態について（同研究2）」、前掲『同研究報告集』、第20号、昭和58年2月。岡田昭人・川村・松波秀子・水野、「旧美濃町の敷地割について（同研究3）」、『日本建築学会東海支部研究報告集』、第21号、昭和59年2月。松波・川村・水野・岡田、「旧美濃町家屋の間取について（同研究4）」、前掲『同研究報告集』、第21号、昭和59年2月。水野・川村・松波・岡田、「旧美濃町家屋の構造形式について（同研究5）」、前掲『同研究報告集』、第21号、昭和59年2月。川村・松波・水野・岡田、「旧美濃町の家並み形態について（同研究6）」、前掲『同研究報告集』、第21号、昭和59年2月。水野・川村・松波・岡田、「美濃市町家の構造について（同研究7）」、『日本建築学会東海支部研究報告集』、第22号、昭和60年2月。水野・川村・松波・岡田、「魚屋港筋家屋の間取について（同研究8）」、前掲『同研究報告集』、第22号、昭和60年2月。川村・松波・水野・岡田、「旧二番町通り家屋の間取について（同研究9）」、前掲『同研究報告集』、第22号、昭和60年2月。川村・松波・水野・岡田、「旧二番町通り家屋の構造について（同研究10）」、前掲『同研究報告集』、第22号、昭和60年2月。川村・水野・野口英一朗、「吉川町筋の家屋の平面形式について（同研究14）」、『日本建築学会東海支部研究報告集』、第23号、昭和61年2月。川村・水野・野口、「吉川町筋の家屋の構造について（同研究15）」、前掲『同研究報告集』、第23号、昭和61年2月。川村・水野・野口、「旧松井氏宅（殿町）について（同研究16）」、『日本建築学会東海支部研究報告集』、第24号、昭和62年2月。川村・水野・野口、「旧美濃町家屋正面の復原について（同研究17）」、前掲『同研究報告集』、第24号、昭和62年2月。野口・川村・水野、「美濃市住民の保存への意識について（同研究18）」、前掲『同研究報告集』、第24号、昭和62年2月。
- 3) 岡田昭人・川村力男・水野信太郎・野口英一朗、「旧美濃市の街区構成とその変遷について（岐阜県美濃市の研究11）」、『日本建築学会大会（東海）梗概集』、昭和60年10月。野口・川村・水野・岡田、「旧一・二番町通り・港町筋家屋の間取について（同研究12）」、前掲『同梗概集』、昭和60年10月。川村・水野・岡田・野口、「旧一・二番町通り・港町筋家屋の構造形式について（同研究13）」、前掲『同梗概集』、昭和60年10月。
- 4) 現在の美濃市中心部の近世以降の旧名称